鎌倉時代の茅ヶ崎　―出土遺物からみた風景―

宇都　洋平(*1)

1　はじめに

1980 年より始まった茅ヶ崎市内の発掘調査から現在に至るまで数多くの中世遺跡が確認されている。その代表となったものが、新湘南バイパス建設に伴う発掘調査(大村ほか 1985)であり、最近の調査ではさがみ縦貫道路建設に伴う発掘調査(服部ほか 2003)が挙げられる。これらの道路整備に伴う発掘調査はその規模から「点」ではなく「面」として遺跡を捉えられる事が出来、大きな調査成果が得られている。また「面」として捉える事が困難な調査地点においても、近年の調査成果の増加により徐々にその数が増え、「点」と「点」を結ぶ「線」が引けるようになってきている。

考古学からみた茅ヶ崎の中世研究においては 90 年代後半には岡本孝之がそれまでの発掘調査成果や寺社の位置、石塔物の分布を包括的に取り入れ、茅ヶ崎の中世の全容を明らかにする試みがなされている(岡本 1996)。また 1998 年に行われた文化資料館講座では大村浩司が茅ヶ崎の自然堤防上に位置する中世遺跡の分布と溝状遺構の重要性を(大村 1998)、富永富士雄が砂丘地帯における中世の様相を報告している(富永 1998)。さらに相模川旧橋脚の保存整備事業の一環として2006年には「旧相模川橋脚を考える」と題したシンポジウムがおこなわれ、全国的に稀な検出事例である中世の橋脚遺構について様々な学問分野の観点から橋脚の再検討をおこなってきた。

このように多くの中世遺跡が発見され、様々な成果が挙がっているが、現時点において中世という時期は細かな時代ごとの研究がなされておらず、漠然とした景観がおぼろげに見えるに止まっている感は否めない。ことに中世前期においては中世後期及び近世段階での土地利用により遺構の検出が困難な状態である。[1]

本稿では市内調査で出土した遺物から中世前期、特に鎌倉時代の景観を考えてみたい。ただし、遺物はその性格として「移動」する可能性を帯びており、出土した地点とその遺物が使用されていた場所が同一とは限らない。しかしながら、鎌倉のような都市遺跡とは異なり遺物の移動はさほど大きくないと考えられ[2]、およその指標にはなり得ると考えられる。なお、遺構外出土や明らかに混入したと思われる遺物に関しては本稿では扱わないこととする。

2　茅ヶ崎における中世前期の遺物分布

図１は地図上に中世の遺構・遺物が出土した地点を示したものである。この図を見る限り、現在の国道１号線より北側、高座丘陵南側の遺跡包蔵地のほぼ全域で中世遺構・遺物が確認できることがわかる。しかし中世前期の遺構・遺物の出土地点を見ると、限られた地域での出土・検出が見てとれる(図３)。ここでは各遺跡の中世前期の遺物または遺構の出土・検出状況を概観していくこととする。

A：上ノ町遺跡(№148)

上ノ町遺跡は小出川左岸に拡がる段丘上に所在する。この段丘は旧流路である「大土腐(おおどぶ)」により南北二つに分けられ、当遺跡はこの内の北側の段丘に位置する。

新湘南国道バイパス建設に伴う第１次調査ではかわらけがⅠ区２号溝状遺構から出土している。また国産陶器は渥美窯甕がⅠ区１号溝状遺構・Ⅱ区９号井戸址から、常滑窯甕がⅣ区４号竪穴状遺構・Ⅳ区８号井戸址・Ⅳ区３７号井戸址・Ⅳ区３８号井戸址から、常滑窯片口鉢Ⅰ類がⅣ区８号井戸址・３７号井戸址・３９号井戸址から出土しており、搬入磁器は龍泉窯系青磁劃花文碗がⅣ区３８号井戸址から、同じく龍泉窯系青磁蓮弁文碗がⅣ区８号井戸址から出土している。

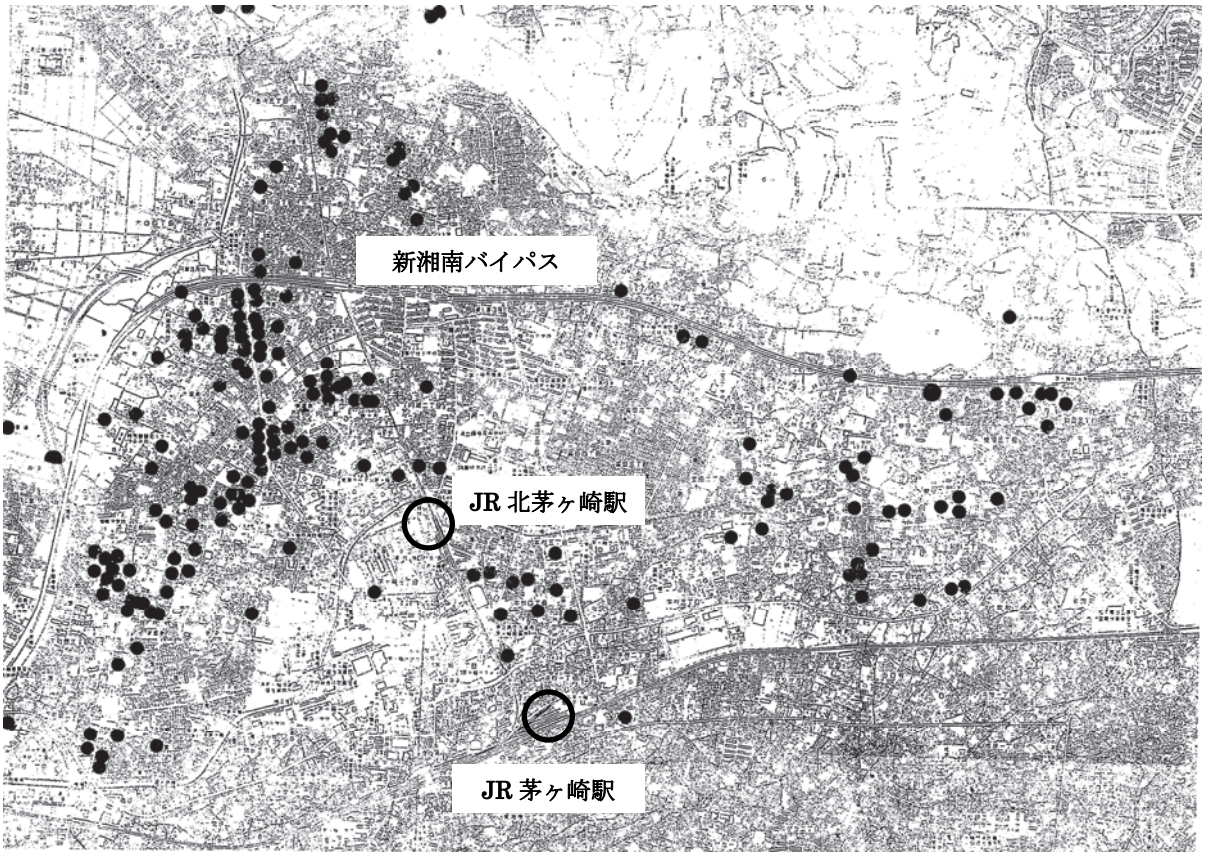


図１　中世遺構分布図

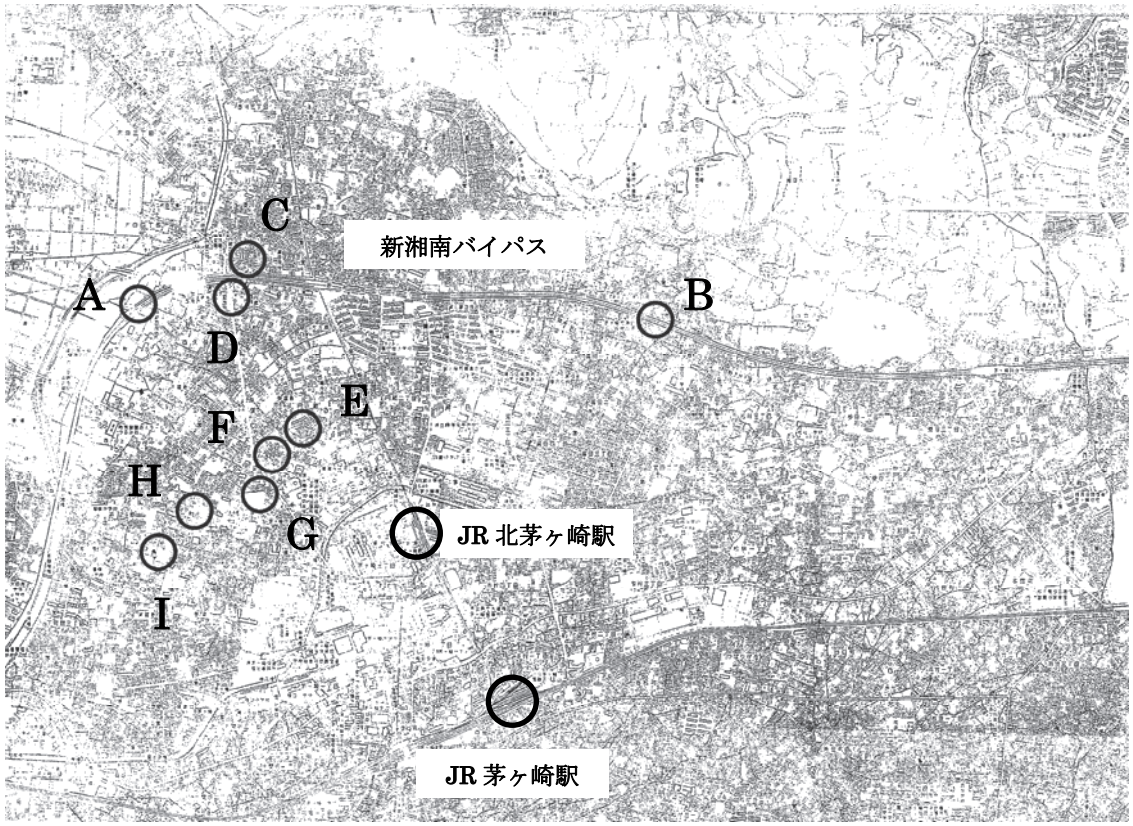


図２　鎌倉時代の遺構分布図

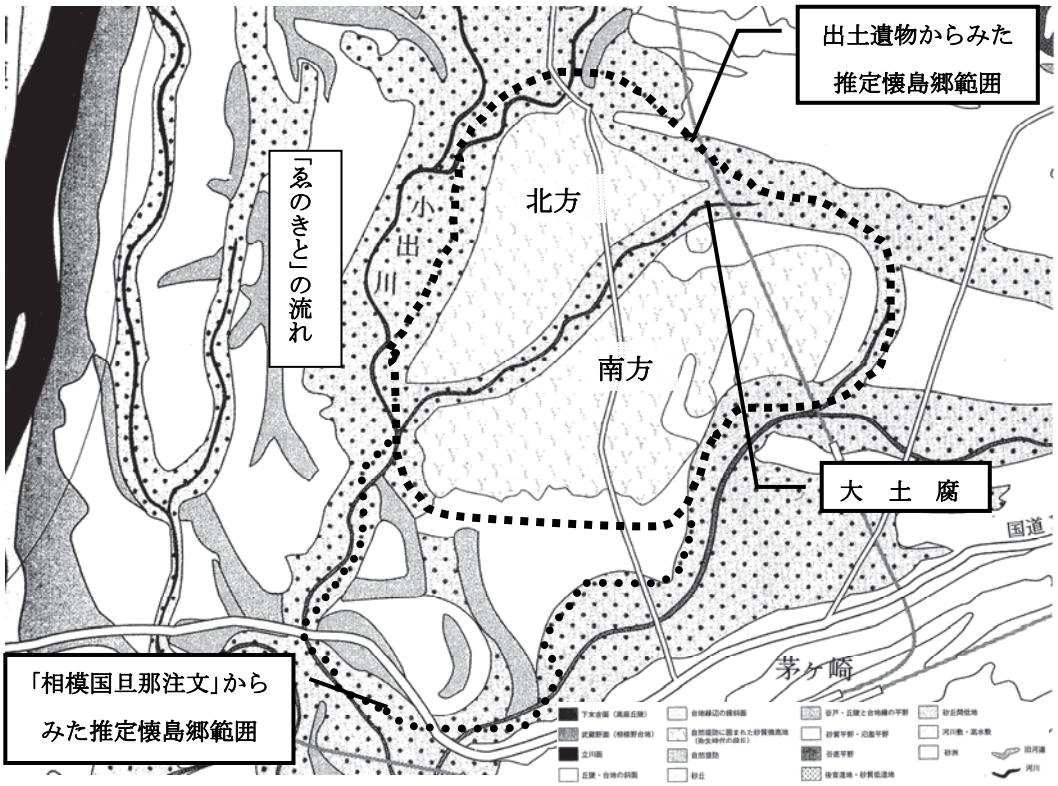


図３　懐島周辺概念図(1999 上本・浅野より一部改変)

この第１次調査では主にⅣ区から中世前期の遺物が多く出土しており、それらの多くが日常雑器であることが特徴といえよう。

県道４５号線(丸子中山茅ヶ崎線)改良工事に伴う第３次調査においてはかわらけが第３区第１４号土坑と第４区ピット９９から、第３区第４号井戸址から南伊勢系土鍋が出土している。また陶磁器は常滑窯片口鉢Ⅰ類口縁部が第４区第３号井戸址から、龍泉窯系青磁劃花文碗が第５区第２号井戸址から、龍泉窯系青磁無文碗体部が第６区ピット７から出土している。

第３次調査地点は第１調査地点に比べ、かわらけの出土量が多い傾向がある。[3]しかしそれ以上に注目されるものが南伊勢系土鍋の出土であろう。伊藤裕偉は南伊勢系土鍋の伊勢以東における出土意義について伊勢神宮との関係を指摘している(伊藤 1992)。ただし鎌倉おいては職能民との関係を指摘する意見もある(拙稿 2004)。現在の茅ヶ崎の大部分は大庭御厨の一部であった事は周知のとおりであるが、その地域内からの南伊勢系土鍋の出土例は興味深い。なお、大庭御厨の名前にもなっている大庭周辺からは現在のところ南伊勢系土鍋の出土例は報告されていない。この南伊勢系土鍋についてはのちに詳しく触れることとする。

一般国道 468 号線(さがみ縦貫道路)西久保ジャンクション建設に伴う第６次調査ではかわらけが２号竪穴状遺構と６０号溝から出土している。国産陶器は瀬戸窯灰釉四耳壺が２３号掘立柱建物と２号竪穴状遺構から、常滑窯甕が６０号溝から、常滑窯片口鉢Ⅰ類が９０号溝からから出土している。この他の国産陶器では東播窯系片口鉢が６０号溝より出土している。舶載磁器は龍泉窯系青磁蓮弁文碗が９号竪穴状遺構・１０号竪穴状遺構から、龍泉窯系青磁無文碗が４５号溝より出土。白磁口兀碗が５号井戸から口兀皿が１号井戸から出土している。鉄製品は６０号溝より鉄釘と飾り金具が、石製品は１号井戸より石墨片岩製板碑が、４５号溝より砥沢産流紋岩質凝灰岩製砥石と箱根産安山岩製石臼が出土している。

第６次調査は調査面積が 15000 ㎡と第１次調査に次ぐ広さであるが、中世前期と思われる遺構・遺物が検出・出土しているのはこの内１０区から１３区のみである。これらの区域に南接するのが第１次調査のⅣ区であり、出土する遺物の構成も似ている。上ノ町遺跡からは中近世の遺跡が全体的に広がっているが、それは中世後期以降の現象であり、中世前期においてはこの地点周辺のみに遺跡が展開していたことがうかがえる。ただし、第６次調査で出土した遺物の内半数近くが溝出土の遺物である事には十分注意しなければならないであろう。

B：二図 B 遺跡(№112)・北 C 遺跡(№160)

二図Ｂ遺跡は第５砂丘上に位置する遺跡であり、南側は標高 10m～11m と南側の低湿地帯より 1.5m ほど高い場所にある。

第１次調査地点からは平安～中世末にかけての土坑墓と思われる遺構や、同じく葬祭に関係すると考えられる集石遺構が検出されている。このうち、手捏ね成形のかわらけが５１号土坑と１００号土坑から、白かわらけが６４号土坑から出土している。

この第１次調査地点は古代より連続した墓域と思われるが、茅ヶ崎では似たような中世墓址がもう一箇所存在する。

北 C 遺跡は JR 香川駅の北側、篠山西側に位置し、当遺跡からは昭和五年に骨蔵器として使用された瀬戸窯灰釉劃花木葉文瓶子１点、同じく瀬戸窯灰釉四耳壺１点、常滑窯壺２点が見つかっている。各遺物の年代は瀬戸窯瓶子が１４世紀第１四半期、瀬戸窯四耳壺が１３世紀第３四半期、常滑窯壺が１３世紀第３四半期と思われる(国平・古川 2003)。

国平健三・古川元也は出土した周辺に存在する五輪塔や宝篋印塔などの石塔類が南北朝から室町期にかけてのものである事から、これらの遺物は伝世品の可能性を指摘しているが(国平・古川　前出)、鎌倉時代後半から室町期にかけて連続して営まれた墓域の可能性も否定できない。

なお蛇足ではあるが、中世の骨蔵器は上ノ町遺跡や後述する広町遺跡に近い円蔵輪光寺本堂裏から１点、また本社Ａ遺跡内に所在する鶴嶺八幡宮境内から１点出土している。

C：間門 B 遺跡(№208)

間門 B 遺跡は小出川左岸約 200m に位置し、遺跡の北側が自然堤防、南側が砂州・砂丘上に存在する。

本遺跡ではかわらけが第３号溝状遺構･第８号溝状遺構から、常滑窯甕が第３号溝状遺構から、常滑窯片口鉢Ⅰ類が第８号溝状遺構・第９号溝状遺構から、片口鉢Ⅱ類が第３号溝状遺構・第８号溝状遺構から出土している。このほかの国産陶器では灰釉の皿や擂鉢が出土している。報告書中では擂鉢について産地を常滑としているが、この時期の常滑に摺鉢はなく、同じ酸化炎焼成の備前窯の可能性を指摘しておきたい。

D：広町遺跡(№191)

広町遺跡は小出川左岸約 800mに位置し、上ノ町遺跡同様、相模川・小出川・千の川など旧流路により形成された自然堤防に囲まれた北側の段丘上に立地している。

土地区画整理事業に伴う第４次調査では７号井戸から手捏ね成形のかわらけ、常滑窯甕および片口鉢Ⅰ類、青磁碗が、３９９号溝状遺構からは南伊勢系土鍋が出土している。

当調査地点の特徴として挙げられるのが、中世前期の遺物が第２１地点からのみ出土している点、また上ノ町遺跡などの周辺遺跡と比較して、１３世紀初頭にさかのぼると思われる遺物の出土がないという点である。また上ノ町遺跡第３次調査第３区４号井戸址と同様南伊勢系土鍋が出土しているが、本遺跡の第２１地点と、上ノ町遺跡第３次調査第３区は非常に近い位置

関係にあり、この二つの遺物はまったく無関係に出土したわけではないと思われる。

E：御屋敷Ｂ遺跡(№157)

御屋敷Ｂ遺跡は広町遺跡の南方に位置し、「大土腐」により分断された南側の段丘に所在する。当遺跡からは、溝により区画された館跡と考えられる遺構が検出されている。本報告がされておらず詳細は不明であるが、遺跡発表会の概要報告によると、館跡と懐島氏との関係が指摘されている。

懐島姓の人物で初めて歴史上に現れるのは『吾妻鏡』に登場する懐島景能である。景能は鶴岡八幡宮造営や公文所の門建設など『吾妻鏡』にその活動が見える。彼の所領は懐島郷のほか、治承寿永の乱で平家方に組した弟大庭景親の跡、また所領ではないが鎌倉若宮大路の西側に屋敷があったことが知られている。[4]彼の父、景宗は大庭御厨を中心として豊田荘等も有しており、[5]「懐島」の姓を名乗ってはいない。恐らく景能が懐島郷を継承した際に懐島姓を名乗ったと思われる。しかしながら、この景能の子の景兼は建保の乱で和田方に与し、敗死。一族は本領を没収されている。概要報告ではこの１２世紀末から１３世紀初頭にかけて活躍した懐島氏との関係性を指摘していることから、館跡の年代は少なくとも１３世紀初頭に収まるものと思われる。

F：下ヶ町遺跡(№184)

下ヶ町遺跡は御屋敷Ｂ遺跡の南方に位置し、南側の段丘上に所在している。

県道４５号線(丸子中山茅ヶ崎線)改良工事に伴う調査が行われている。調査地点の１区から１６区が下ヶ町、１７区から３８区が円蔵前遺跡に該当しているが、報告書では下ヶ町遺跡第８次調査と一括されているので、本稿もその呼び名に準じる。遺跡の位置は御屋敷Ｂ遺跡の南方に位置する。

８次調査の１２区６号井戸址よりかわらけが２点出土している。

G：勝沼遺跡(№158)

勝沼遺跡も前述の円蔵前遺跡・下ヶ町遺跡同様、南側の段丘上に位置する。

集合住宅建設に伴う第１次調査で、本遺跡から溝２、溝２０７など中世に属すると思われる遺構が検出されている。現在のところ本報告がなされておらず詳細は不明であるが調査をおこなった斎木秀雄氏のご教示によれば、溝２及び溝２０７は道路側溝の可能性が高いとの事である。仮にこの溝間が道路であるとすると、幅１０ｍ 以上の非常に大規模な道路ということになる。また両溝の出土遺物から、古代末から中世初頭にかけてこの道路遺構が構築されたとのことである。

なお、この勝沼遺跡で検出された道路遺構とほぼ同時期に構築されたと考えられる道路状遺構が四図Ａ遺跡(№61)から検出されている。(富永 2000)

H：金山遺跡(№182)

金山遺跡は小出川左岸約 700m、南側段丘のほぼ中央に位置する。

第４次調査では２期の井戸より中世前期の遺物が出土している。第１号井戸址からは茅ヶ崎出土のものとしては一番古いタイプの常滑窯甕が出土している。このほかの遺物として同じく常滑窯片口鉢Ｉ類がある。また第２号井戸址からは３点の青磁と、転用陶器および転用陶片、北宋銭、砥石、軽石などが出土している。青磁の内２点は龍泉窯系青磁劃花文であるが、もう一点は同安窯青磁櫛掻文碗と思われる。また転用陶器であるが、常滑窯甕の上部を打ち欠き、捏ね鉢として転用されているものが出土している。報告書では第１号井戸址を１３世紀代、第２号井戸址を１４世紀としているが、出土遺物を見る限り第１号井戸址を１３世紀前半、第２

号井戸を１３世紀中頃までの年代で考えても問題はないと思われる。

Ⅰ：本社Ａ遺跡(№154)・本社Ｂ遺跡(№181)

本社Ａ・Ｂ遺跡は金山遺跡の南側に所在する。本社Ａ遺跡内には源頼信が平忠常の乱平定の際に岩清水八幡宮を勧請、前九年の役の際には源義家が銀杏を植えたとの伝承を持つ鶴嶺八幡宮、また鎌倉末期から南北朝期にかけて造立され『二階堂十人墓』の伝承をもつ懐嶋山龍前院などの鎌倉時代との関係性を思わせる寺社が存在している。また大正十三年６月に、鶴嶺小学校校庭から金鍍金を施された銅製の銚子と同じく金鍍金を施し、つるの部分に「藤原寿命婦」と印刻された提子が工事中に出土している。

本社Ａ遺跡第７次調査では何時期にもわたり重複した中世の溝状遺構が検出されているが、このうち５号溝および６号溝から１３世紀中頃から１４世紀前半と思われるかわらけがまとまったかたちで出土している。５号溝と６号溝は軸線が異なっており、５号溝の軸線が中世後期に至るまで踏襲されている事は注目に値する。

なお、鎌倉時代ではないが１号溝からはいわゆる「小田原系」と考えられるものが出土している。後北条氏と鶴嶺地区の関係を考える上で貴重な資料といえよう。また近在の第１次調査においては中世後期のかわらけが第７０号土坑から一括廃棄された状態で出土している事を参考までに挙げておく。

また本社Ｂ遺跡第２次調査では２号建物址および１号土坑からかわらけが、４号土坑からかわらけ、龍泉窯系青磁蓮弁文碗、鉄釘が出土している。４号土坑は２２点のかわらけの実測図が掲載されている。このうち１点が器壁が薄く内湾し器高がほかのかわらけに比べ高い、いわゆる「薄手丸深」と呼ばれるものであり、また２点が内折れの小皿である。

このほかに本社Ａ・Ｂ遺跡と隣接する宮ノ腰遺跡第９次調査のＴ１号溝状遺構からも鎌倉時代後半のかわらけが出土している。

３　遺跡の展開

前章で茅ヶ崎の中世前期遺物出土地点を眺めてきたが、これらの多くが相模川・小出川・千の川など旧流路により形成された自然堤防に囲まれた段丘上に位置していることがわかる。また周辺では鶴嶺八幡宮をはじめ、竜前院、宝生寺、円蔵神明神社など源氏および懐島氏・二階堂氏に関連する伝承が数多く残されており、この「大土腐」を挟んだ南北二つの段丘上がいわゆる「懐島郷」の範囲内であった事はほぼ間違いない。本章ではこれら懐島郷と推定される地域の遺物から、鎌倉時代の懐島郷を考えていきたい。なお便宜上、「大土腐」を挟んだ北側の段丘を「懐島北方」、南側を「懐島南方」と呼称することとする。

まず、懐島北方であるが、各調査地点をみても中世から近世をとおして、恒久的な土地利用がされている。しかし、懐島北方の最盛期は中世後半から近世にかけてである。

鎌倉時代の検出遺構は段丘の北限周辺のごく限られた地域に集中している事が見て取れ、このうち上ノ町第１次調査、第６次調査地点からは１３世紀初頭～１４世紀前半、上ノ町遺跡第３次、広町遺跡第４次調査地点が１３世紀中葉から１４世紀前半の年代が考えられる遺物が出土しており、遺跡の年代が下ると共にやや東に展開していく事がわかる。

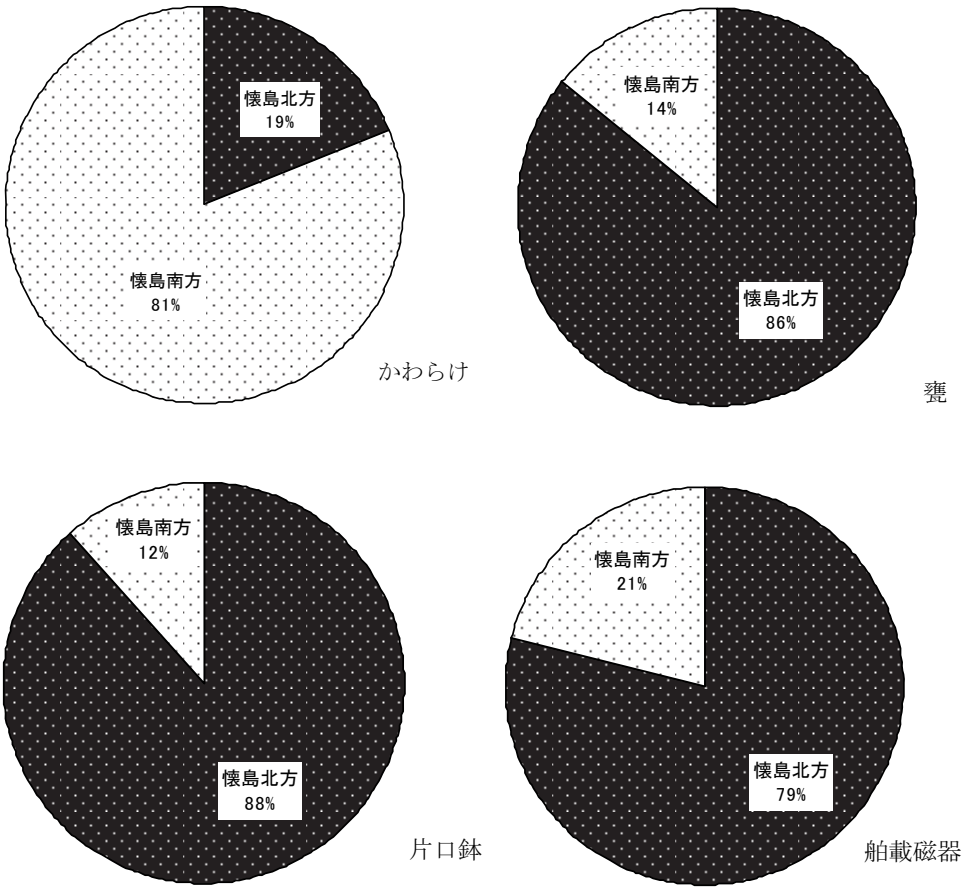


表１　器種別出土傾向

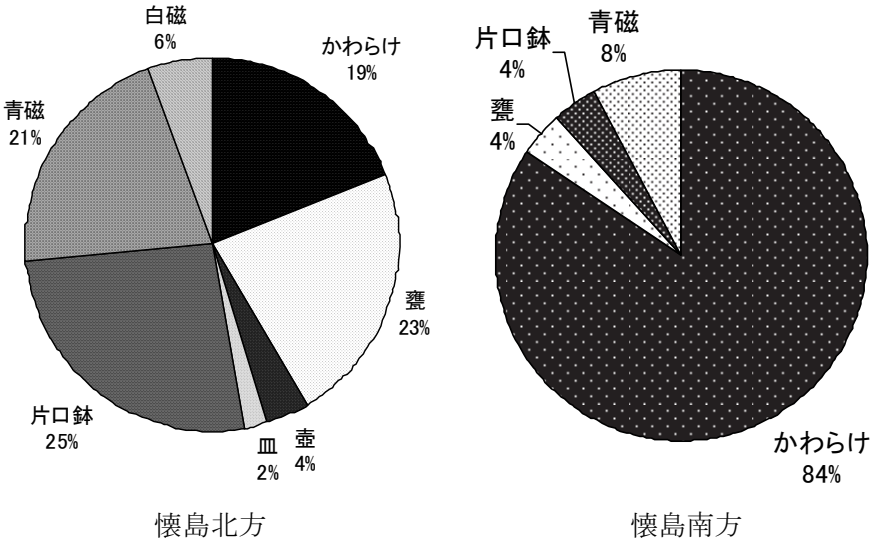


表２　地域別遺物組成

次に懐島南方であるが、懐島南方においても北方同様に中世から近世にかけて恒久的な土地利用がなされている。しかし、近世遺構・遺物の検出・出土が顕著なのは大土腐周辺であり、南側の分布は非常に薄いものになる。この事は近世の街道と無関係ではなく、恐らくは懐島北方をはしる大山街道と、懐島南方のさらに南側に展開する東海道に中心地が移動したためであ

ろう。懐島南方の土地利用の最盛期は中世後半と考えられる。

鎌倉時代の遺構は段丘上のほぼ全域で確認されている。南方の主要遺跡の多くが現在整理中の為、仔細は不明であるが、少なくとも懐島南方の最も時代が上る遺構は段丘上の中央に位置し、１３世紀前半から１４世紀前半になると本社Ａ・Ｂ遺跡に見られるように西側に展開していくことがわかる。

以上、遺物の分布からは鎌倉時代には段丘上に限り土地利用がされていたことがわかる。しかし文明二年の「相模国旦那注文」（『茅ヶ崎市史』１　百八七号）には懐島郷内の地名として段丘より南側に位置する「下のまちや(下町屋)」がみえる[6]。これは懐島の南限が段丘上ではなく氾濫平野にまで及ぶことを示唆しているが、同注文は室町後期の資料であり、鎌倉時代以降に土地開発により段丘南側の氾濫平野までその範囲が拡がった可能性もある。

４　遺物組成

懐島北方と南方では出土遺物の組成が大きく異なる。本章では出土遺物の組成から懐島郷内の地域別の性格を考えていきたい。

表２は北方と南方の出土遺物をグラフにしたものである。北方を見てみると、片口鉢の出土量が全体の四分の一を占めており、続いて甕、青磁の順になっている。かわらけの出土量は全体の二割弱である。かわらけ以外の出土遺物はいわゆる日常雑器であり、これらが八割近く占めているのは場の性格を考える上で興味深い。さらに北方の地点を細かく見ていくと、甕や片口鉢は北方全域から出土しているが、かわらけは西側の上ノ町遺跡第１次地点、第６次地点からは３点のみで、残りは東側の上ノ町遺跡第１次地点､広町遺跡第４次地点から出土している。またこの東側地域からは南伊勢系土鍋が出土している。懐島に限らず茅ヶ崎全域を見ても、煮炊具の出土例は当該地域から出土した南伊勢系土鍋の２点のみである[7]。この煮炊具の出土の少なさは鎌倉と同様、鉄製の煮炊具を日常的に使用していた事を意味しているものと思われる。鎌倉では鉄の需要に伴い、鉄鍋の補完として他地域で生産された煮炊具が使用されていたとの指摘がある（馬淵 1987)。鎌倉においては南伊勢や中北伊勢の煮炊具のみならず畿内や九州に生産地をもつ煮炊具も出土しているが、当該地域では現在のところ南伊勢系土鍋以外の出土例はない。煮炊具以外の搬入品では茅ヶ崎からは備前窯や東播窯など伊勢より西で生産された遺物の出土例がある。このことから懐島において南伊勢系土鍋が選択的に持ち込まれ、それが非日常的な用途として用いられたと考えられる。南伊勢系土鍋の出土事例として秦野市東田原中丸遺跡台地中央地区や平塚市真田・北金目遺跡群 13 区、西之谷 B 遺跡・横須賀市蓼原東遺跡などがあり[8]、このうち真田・北金目遺跡群 13 区の出土状況は埋納された常滑窯三筋壺の蓋として使用されている。鎌倉周辺の地域においては南伊勢系土鍋の用途は非日常的な目的に使用していた可能性があることを指摘したい。

次に南方の出土傾向を見てみると、かわらけの出土量が突出して多く、日常雑器の出土量を凌駕している点である。無論これらは本社Ａ・Ｂ遺跡から出土しているかわらけの量が大きく影響しているが、少なくとも本社Ａ・Ｂ遺跡周辺はかわらけを他地域より多く使用する場であった事がうかがえる。かわらけについて河野眞知郎は宗教的行事や会食などの非日常的空間でかわらけが多く使用され、都市や交易の中心的町邑、寺社や居館などでは多く使用されるが、農村や人口集中の少ない所は使用する機会が少ないと指摘している（河野 1986)。懐島全域での出土傾向をみると懐島南方西側はかわらけの使用される頻度は他地域に比べ高かったと考えられ、一般集落とは異なる非日常的空間が存在していた事が窺える。

この空間が鶴嶺八幡宮、龍前院、勝福寺、二

階堂氏の居館のいずれとの関係を持っているかは現在のところ不明である。しかしながら、これらのかわらけは１３世紀中葉以降のものであり、鎌倉時代初頭に遡り得るものはない。年代で考えるのであれば二階堂氏が懐島郷を領していた時期であり、懐島南方西側の非日常的空間は二階堂氏の入部が背景となり鎌倉よりもたらされた可能性を指摘しておきたい。

５　交通

現在のところ交通に関係する遺構は相模川の旧橋脚と勝沼遺跡の２例しか報告されていない。しかし文献から懐島郷をみるとこの地域が交通の要所であった事がわかる。すなわち建久元年に源頼朝が上洛した際の軍勢は懐島を通過し、中先代の乱で北条時行を討伐するために足利尊氏が鎌倉へ向かう際､十間坂で野営をしている。また時代は下るが、上杉禅秀の乱においても足利持氏が懐島に陣を張っている(貫　1981)。

これらの道はおそらく東西道と想像されるが、勝沼遺跡では懐島郷を東西にはしる道路遺構が検出されている。現段階ではこの二つが同一のものか判断するのは早計であり今後の資料の蓄積に期待したい。次に足利尊氏が鎌倉に攻め入る際に利用した道は十間坂の地名から見て懐島郷より南側、近世の東海道に近い場所もしくは同一の場所に存在していたことがわかる。このほか、遺跡の展開から道を推定すると懐島北方では西から東への展開がみえる事から大山街道周辺に砂丘上を東西方向の道が存在した可能性がある。なお、二図Ｂ遺跡はこの砂丘の延長線上に位置している。またこの道は懐島を通過した後、自然堤防上をはしり一ノ宮へ向かう南北道になるものと思われる。

また旧相模川橋脚はその橋のかかる流れが東西方向であることから、南北方向に道が存在していたと思われる。この道は段丘西裾を通り先述の東西道と合流または交差するものと思われる。

陸路以外の交通の手段として水運が考えられるが、二階堂氏所領注文によれば懐島と萩曾禰(萩園)の境には「ゑのきと」の流れがあったとされ(茅ヶ崎市史資料編　1977)、現在の小出川とほぼ同位置で河川が存在していた事がわかる。太平洋を西から来た船は柳島付近で一度荷降しされ、川を北上したものと思われる。柳島の名前も前述の二階堂氏所領注文に現れる地名である。

６　まとめと今後の課題

以上鎌倉時代の茅ヶ崎を懐島中心に眺めてきたが、改めてここで整理をしておく。鎌倉時代前半にあたる１３世紀初頭に懐島北方においては上ノ町第１次調査地点及び第６地点周辺で集落が形成されており、１３世紀中葉になると、やや東側に集落が広がりをみせる。しかし、東側に広がった地域の遺物からはそれまでの西側の遺物組成とは異なり、南伊勢系土鍋のような非日常的な性格を持つ遺物が含まれる。この非日常的空間が御厨を媒体とした伊勢神宮との関係を示唆しているかは、現段階で判断することは不可能である。しかし他地域の出土事例と合わせて考えるのであれば、伊勢神宮との直接的な関わりを求めるよりも祭祀などの間接的な関わりを求める必要があろう。

懐島南方では、古代から中世初期の道路が検出されており、段丘中央部付近からは溝により区画された館跡が検出されている。周辺には懐島景能の館跡と伝わる円蔵神明神社が存在し、懐島氏が所領していた時期の中心地域であったと考えられる。これが１３世紀中葉の二階堂氏所領の時期になると、本社周辺の地域が活発化し、かわらけが一括した状態で廃棄される事例が出てくる。これら出土したかわらけは寺社の宗教的行事か居館における宴などで使用されたものと考えられるものの、本稿ではどちらかと断定する事は出来なかった。しかしここで注目すべきはかわらけを大量消費する行為を二階堂

氏の懐島入部を背景として鎌倉よりもたらされた点である。かわらけの大量使用は滝口の侍身分の者の儀礼に基づく行為から始まり（脇田1997）、鎌倉においては武家の儀礼だけではなく様々な非日常的空間で使用し、一括廃棄をされるかたちになる。懐島のかわらけをみると、その上限が１３世紀中葉であり、それ以前のものは現在のところ確認されていない。このことから京都の文化が懐島に直に入ってきたと考えるよりは鎌倉風の非日常的空間を形成する性格を帯びたかわらけおよび文化が二階堂氏を媒体として懐島に伝わったと考えられる。また、懐島北方東側で出土した南伊勢系土鍋が鎌倉での補完的な性格を持つ煮炊具ではなく、非日常的性格を帯びている点は指摘したとおりである。この地方的な側面と、鎌倉的な側面を持ち合わす懐島郷は中世都市鎌倉の周辺に存在した地域の性格を考える上で非常に興味深い事例といえよう。

懐島以外でも二図Ｂ遺跡や北Ｃ遺跡など鎌倉時代に属すると思われる遺構が検出されている。今回紹介したこの２遺跡は共に墓址であるが、単体で墓が存在したわけではなく、やはり周辺に懐島規模ほどではないものの、それなりの集落が形成されていたと思われる。このことは周辺の中世後期以降の遺跡から混入品として出土している中世前期の遺物が多い点からも理解できよう。

また懐島郷をはじめ、これらの遺跡はそれぞれが隔絶した立地にあるわけではなく、交通網で結ばれている事は容易に想像がつく。本稿では文献や遺跡の立地・展開から南北１本、東西３本の道路を推定し、また水運についても二階堂氏所領注文から地名および河川の存在を拾ってみた。柳島については茅ヶ崎市の遺跡台帳では周知の埋蔵文化財包蔵地になっておらず、発掘調査もなされていない地域であるため鎌倉時代だけではなく中世全般にどのような土地利用がされていたかはわからない。しかし水運が活発化した鎌倉時代の関東において「ゑのきと」の流れと相模川および相模湾にはさまれた地域を流通拠点として利用していなかったとも考えづらい。

以上、鎌倉時代の茅ヶ崎について概観してきた。今後様々な調査成果が上がる中で本稿が叩き台の役割を担えれば幸いである。茅ヶ崎は中世後期になると、人々の活動域が市内北部全域に広がるのは図２で示した通りであるが、鎌倉時代以降いつの時代に活動域が拡大するのか、また中世後期に多く検出される溝状遺構の性格についても今後考えなくてはならないと思う。

最後に以下の方々に御教示を賜った。篤く御礼申し上げる。

石塚勝・伊藤俊一・大村浩司・斎木秀雄・谷口肇・富永富士雄・原廣志・馬淵和雄・宮下秀之（五十音順・敬称略）

*1　藤沢市教育委員会

註

[1] 富永富士雄氏のご教示による。

[2] 鎌倉においては100m以上離れた調査地点別々の層位の遺物が接合したという報告がある(河野1989)

[3] あくまでも遺構内出土の遺物に限っての事であり、新しい時代の遺構に混入したもの、遺構外出土のものを含めばその限りではない。ただし、当該期に属すると思われるかわらけは第１次調査と第３次調査の調査面積を比較すれば、やはり第３次調査からの出土する密度は高いと思われる。

[4] 『吾妻鏡』
治承五年五月廿四日条　養和元年六月八日条
文治四年十月廿日条　建久五年十二月二日条
正治三年三月十日条

[5] 『吾妻鏡』文治四年十一月廿二日条

[6] 同注文にはこのほか「ちかさき（茅ヶ崎)」・「やはた（矢畑)」の地名がみえ、１５世紀後半には氾濫平野部の開発が進んでいたことがわかる。

[7] １４世紀以降では中北伊勢系と思われる羽釜が出土している。出土する煮炊具が伊勢国と関係している点は留意しなければならない。

[8] 佐々木健策の報告(佐々木　2005)によれば、このほかに伊勢原市上町並遺跡からも南伊勢系土鍋の出土事例があるとのことである。

引用参考文献

伊藤裕偉　1992 「南伊勢系土師器の展開と中世工人」『研究紀要　１号』三重県埋蔵文化財センター

伊藤裕偉　1992 「伊勢の中世煮沸用土器から東海を見る」第４回 東海考古学フォーラム『「鍋と甕 そのデザイン」』

上本進二他　1999 「茅ヶ崎低地の地形発達と遺跡形成」『文化資料館調査研究報告７』茅ヶ崎市文化資料館

宇都洋平　2004 「南伊勢系土鍋の鎌倉における出土傾向」『鶴見考古　第４号』鶴見大学文学部文化財学科河野ゼミ

大村浩司　1998 「茅ヶ崎の中世遺跡(2)～自然堤防地帯における様相～」文化資料館講座「茅ヶ崎の中世を考える」発表レジュメ

大村浩司　2008 「史跡　旧相模川橋脚　確認調査報告」茅ヶ崎市教育委員会

大村浩司他　2007 「矢畑金山遺跡Ⅲ」茅ヶ崎市教育委員会

大村浩司他　2005 「浜之郷本社Ａ遺跡」 茅ヶ崎市教育委員会

大村浩司他　1995 「円蔵・御屋敷Ｂ遺跡」『第６回茅ヶ崎市遺跡調査発表会』

大村浩司他　1985 『新湘南国道埋蔵文化財調査報告書』新湘南国道埋蔵文化財調査会

大村浩司他　1997 『上ノ町・広町遺跡』茅ヶ崎市埋蔵文化財調査会　茅ヶ崎市文化振興財団

岡本孝之　1996 「茅ヶ崎中世遺跡の展開」『文化資料館調査研究報告４』茅ヶ崎市文化資料館

岡本孝之他　1992 『鶴嶺八幡宮参道』茅ヶ崎市埋蔵文化財調査会

河野眞知郎　1986 「鎌倉における中世土器様相」『神奈川考古　第21号』神奈川考古学同人会

河野眞知郎　1989 「街なかのゴミ処理問題」『よみがえる中世３　武士の都鎌倉』平凡社

菊川英政　2002 「矢畑・勝沼遺跡」『第１３回茅ヶ崎市遺跡調査発表会』

北野義夫　1959 「中世に於ける火葬墳墓」『郷土茅ヶ崎』改巻第１号

北野義夫　1960 「香川出土の蔵骨器」『郷土茅ヶ崎』改巻第３号

国平健三他　2003 「茅ヶ崎市香川の中世墓址」『文化資料館調査研究１１』茅ヶ崎市文化資料館

黒板勝美編　1968 『国史大系　吾妻鏡』吉川弘文館

五味文彦　1978 「大庭御厨と「義朝濫行」」『茅ヶ崎市史研究３』

斉藤彦司　1988 「茅ヶ崎市龍前院の五輪塔」『中世の石造文化財　茅ヶ崎市文化財資料集１１』茅ヶ崎市教育委員会

佐々木健策　2005 「神奈川・伊豆」『中世土器・陶器編年研究記録 3 関東、東海における中世土器(煮炊具)の最近における研究成果』科研費・「中世土器・陶器編年研究と流通様相の年代的解明」班

茅ヶ崎市史編集委員会　1977『茅ヶ崎市史　資料編

(上)』茅ヶ崎市
中世土器研究会編　1995「概説　中世の土器・陶磁器」真陽社
富永富士雄　1998 「中世における砂丘地帯の様相」文化資料館講座「茅ヶ崎の中世を考える」発表レジュメ
富永富士雄　2000 「四図 A 遺跡(№61)」『神奈川県埋蔵文化財調査報告４２』神奈川県教育委員会
富永富士雄他　1987 「茅ヶ崎の遺跡」『湘南考古学同好会々報３０』湘南考古学同好会
中村哲也他　2005 『香川・下寺尾遺跡群発掘調査報告書』香川・下寺尾遺跡群発掘調査団
貫達人他　1981 「古代・中世」『茅ヶ崎市史　通史編』茅ヶ崎市
沼田頼輔　1960 「二階堂十人墓」『郷土茅ヶ崎』改巻第３号
服部実喜　1994 「南武蔵・相模における中世の食器様相(2)」『神奈川考古　第 30 号』神奈川考古学同人会
服部実喜他　2003 『上ノ町遺跡』かながわ考古学財団
福島金治他　1998 「大庭御厨の景観」藤沢市教育委員会
藤井秀男　1999 「浜之郷・本社Ａ遺跡第７次調査」『第１０回茅ヶ崎市遺跡調査発表会発表要旨』茅ヶ崎市教育委員会
藤沢良祐　2008 「中世瀬戸窯の研究」高志書院
文化資料館と活動する会　1996 「遺跡から見る鶴嶺八幡宮とその周辺」茅ヶ崎市教育委員会
馬淵和雄　1987 「中世都市鎌倉の煮炊様相」『青山考古　５号』青山考古学会
宮重俊一　2004 「広川・公所遺跡群 西之谷遺跡」『遺跡が語る地域の歴史』平塚市博物館
若林勝司　2004 「真田・北金目遺跡群の調査」『遺跡が語る地域の歴史』平塚市博物館
脇田晴子　1997 「文献から見た中世の土器と食事」『国立歴史民俗博物館研究報告　第 71 集』国立歴史民俗博物館

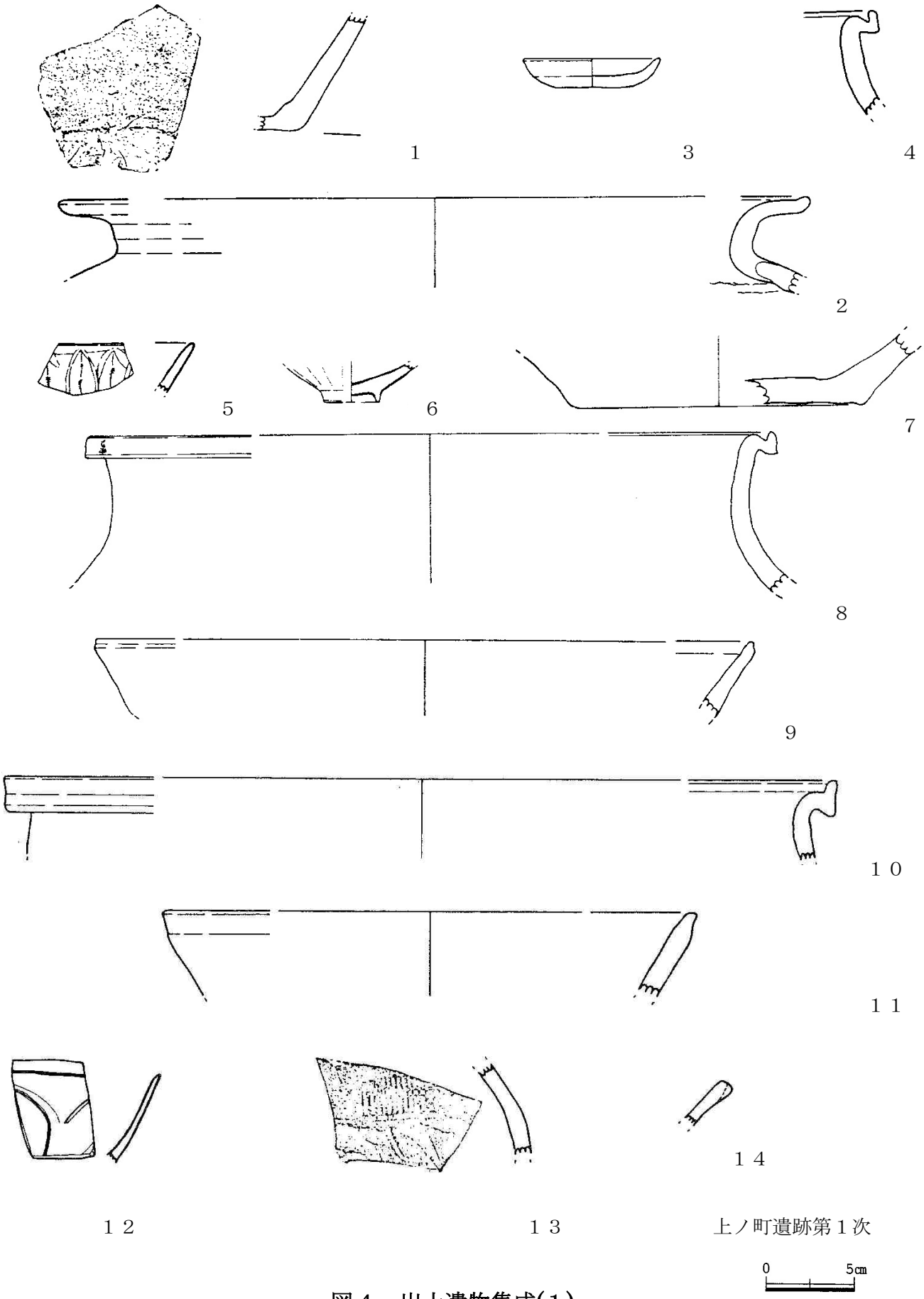
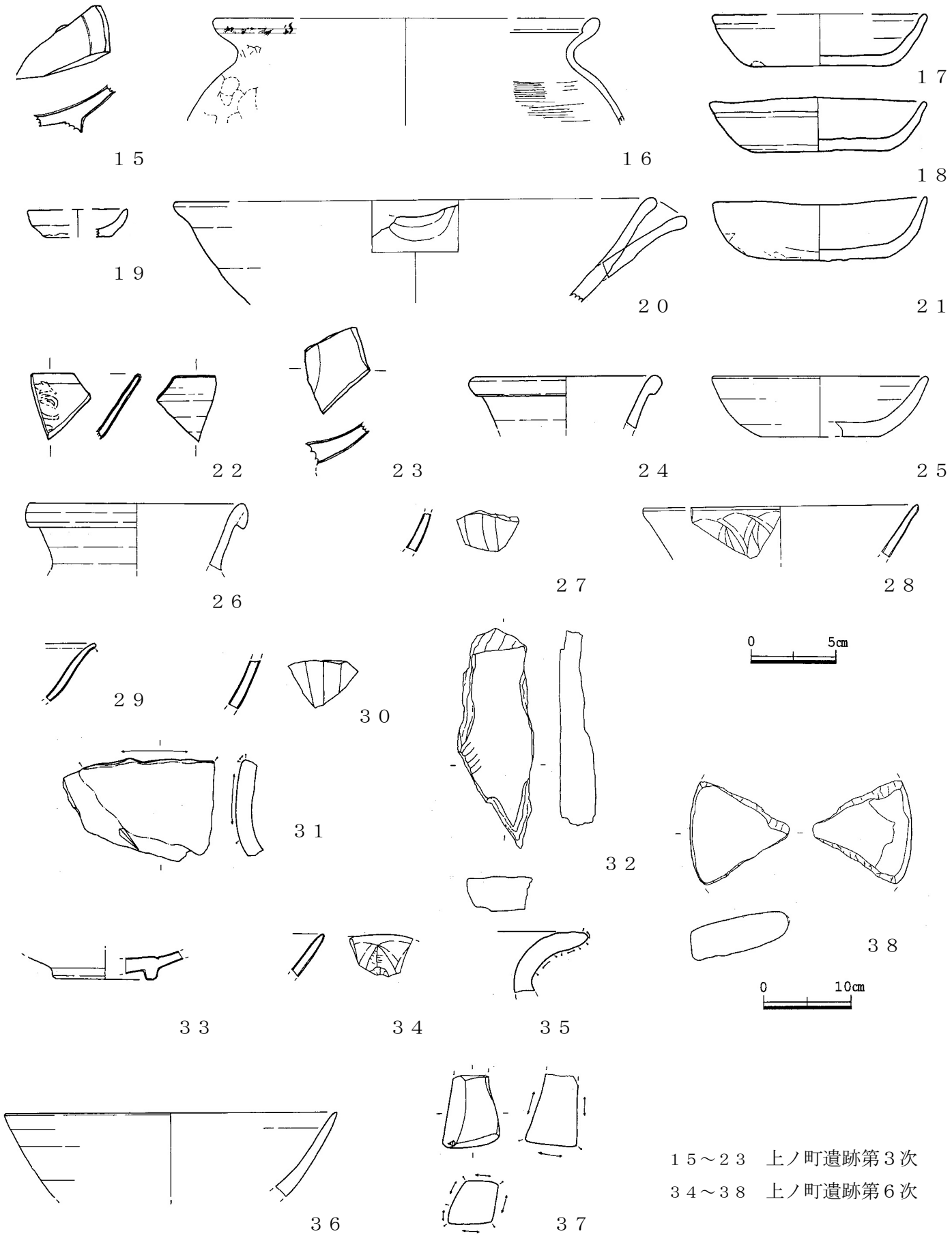


図４　出土遺物集成(１)



１５～２３　上ノ町遺跡第３次
３４～３８　上ノ町遺跡第６次

図５　出土遺物集成(２)

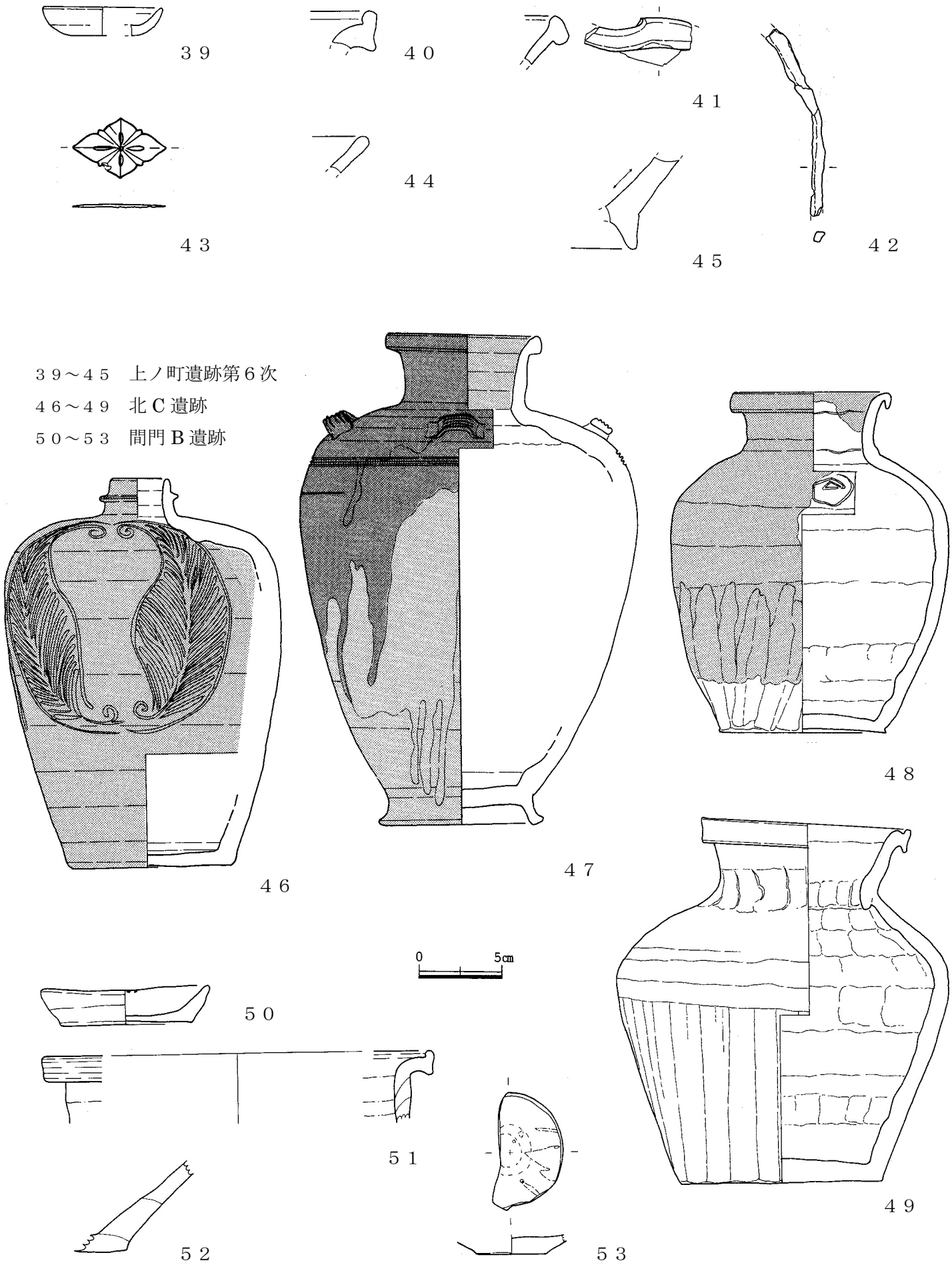
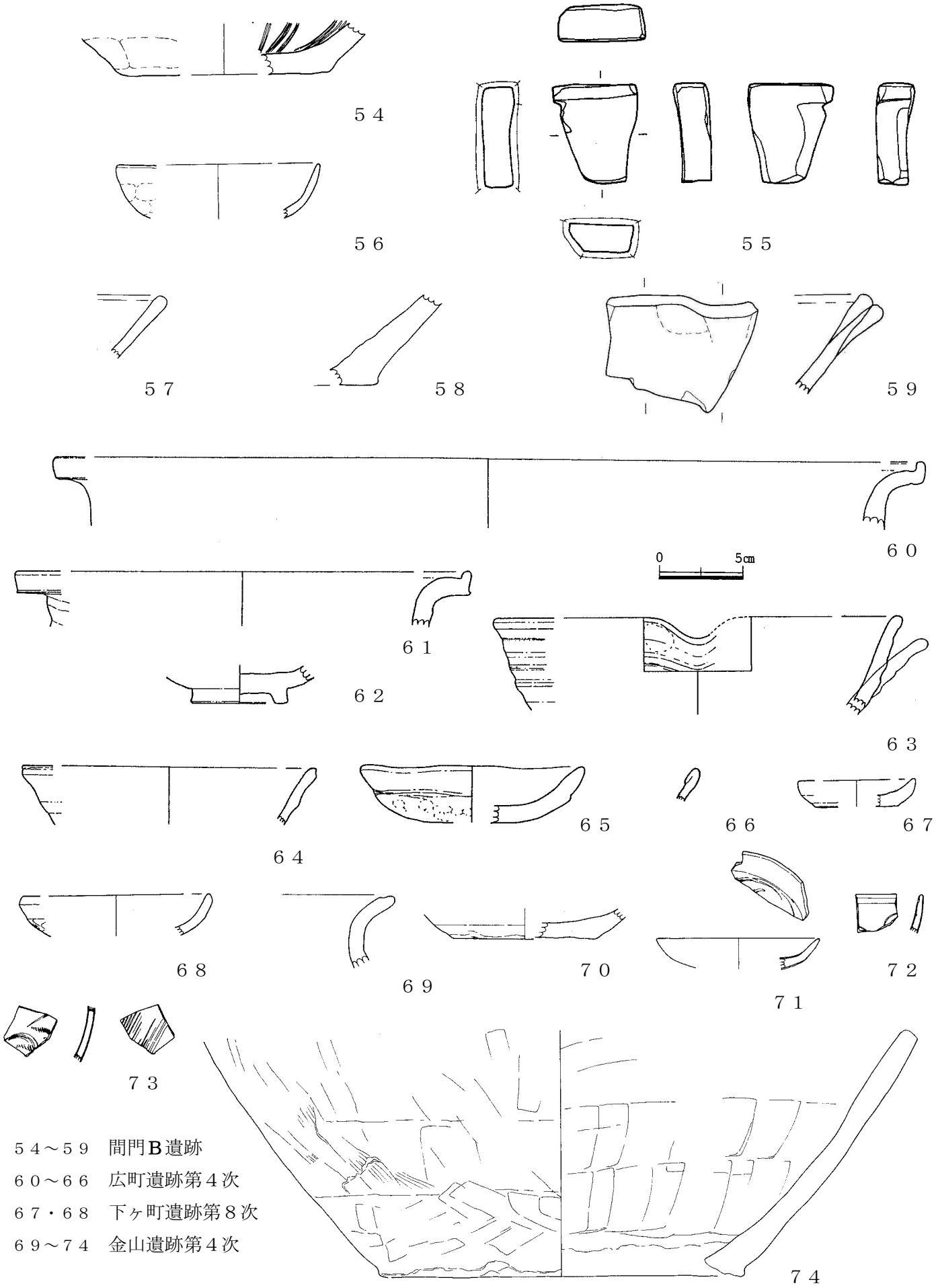
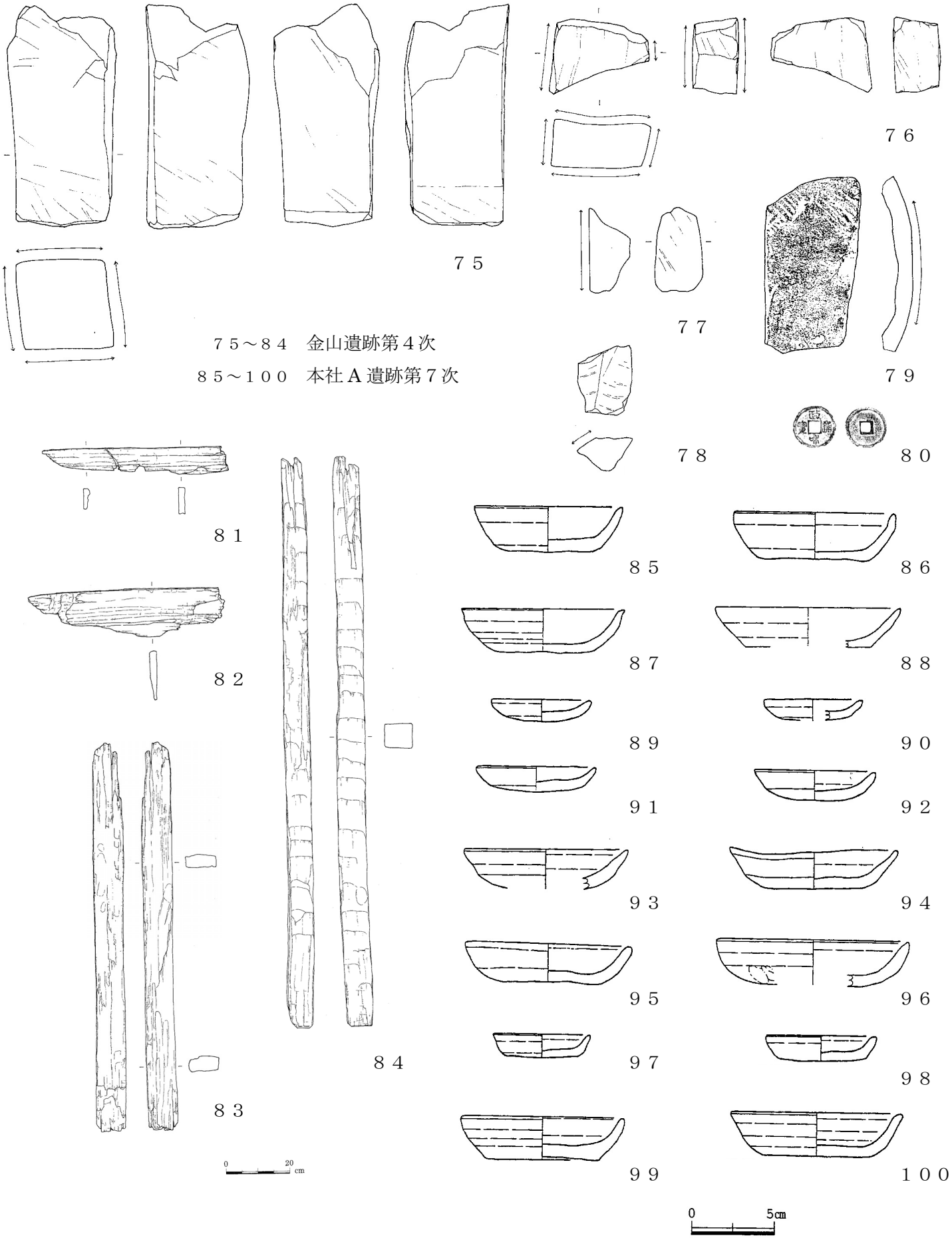

３９
４０
４１
４２
４３
４４
４５
３９～４５　上ノ町遺跡第６次
４６～４９　北Ｃ遺跡
５０～５３　間門Ｂ遺跡
４６
４７
４８
４９
0
5cm
５０
５１
５２
５３

図６　出土遺物集成(３)



５４～５９　間門Ｂ遺跡
６０～６６　広町遺跡第４次
６７・６８　下ヶ町遺跡第８次
６９～７４　金山遺跡第４次

図７　出土遺物集成(４)



７５～８４　金山遺跡第４次
８５～１００　本社Ａ遺跡第７次

図８　出土遺物集成(５)

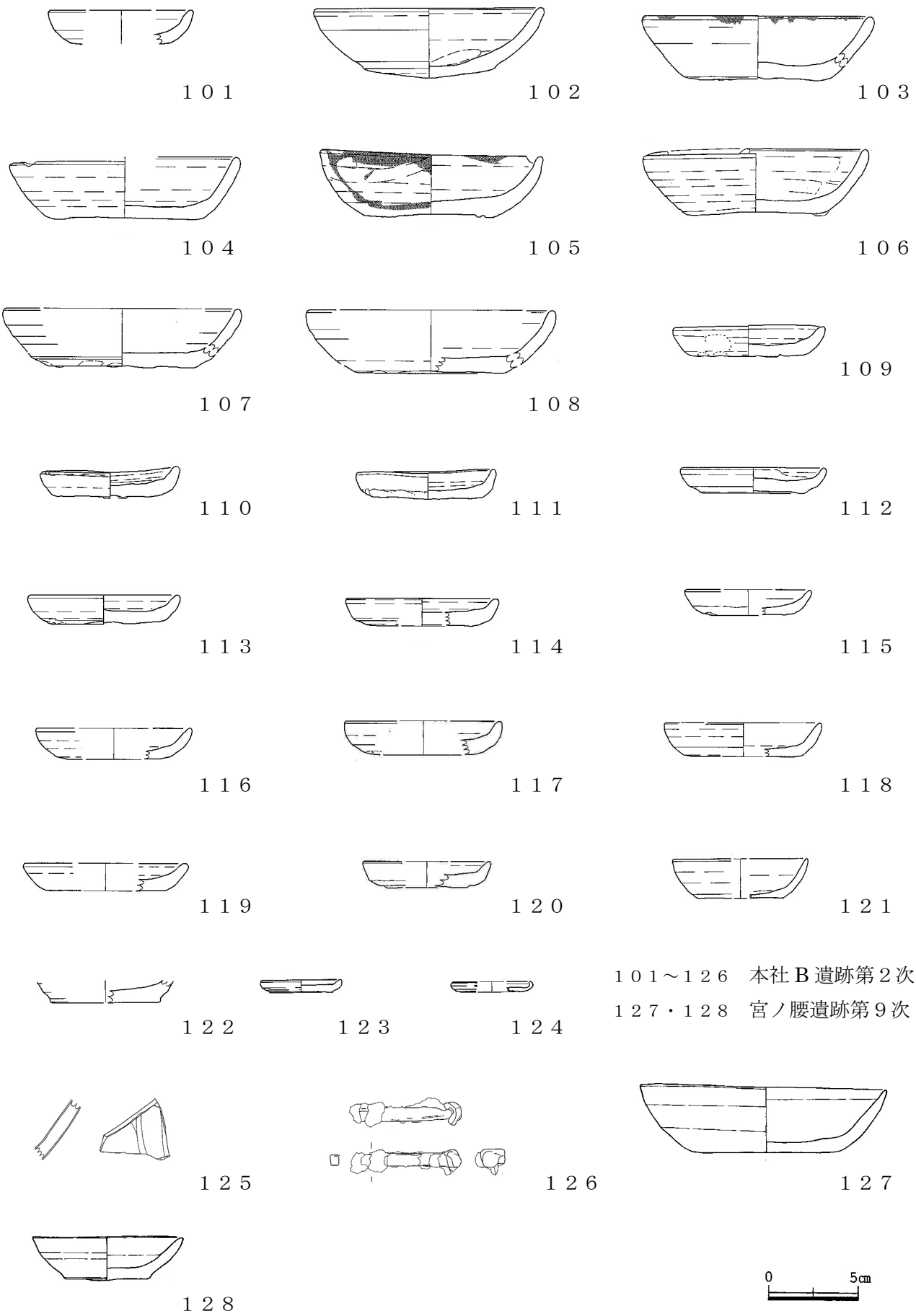

１０１
１０２
１０３
１０４
１０５
１０６
１０７
１０８
１０９
１１０
１１１
１１２
１１３
１１４
１１５
１１６
１１７
１１８
１１９
１２０
１２１
１２２
１２３
１２４
１０１～１２６　本社Ｂ遺跡第２次
１２７・１２８　宮ノ腰遺跡第９次
１２５
１２６
１２７
１２８
0
5cm

図９　出土遺物集成(６)

図版No.	遺跡名	出土遺物	部位	出土遺構
1	上ノ町遺跡(第１次)	渥美窯製品	底部	Ⅰ区１号溝状遺構
2	上ノ町遺跡(第１次)	轆轤成型かわらけ	口縁部	Ⅰ区２号溝状遺構
3	上ノ町遺跡(第１次)	渥美窯製品甕	口縁部	Ⅱ区９号井戸址
4	上ノ町遺跡(第１次)	常滑窯製品甕	口縁部	Ⅳ区４号竪穴状遺構
5	上ノ町遺跡(第１次)	龍泉窯系青磁蓮弁文碗	口縁部	Ⅳ区８号井戸址
6	上ノ町遺跡(第１次)	龍泉窯系青磁蓮弁文碗	底部	Ⅳ区８号井戸址
7	上ノ町遺跡(第１次)	常滑窯製品甕	底部	Ⅳ区８号井戸址
8	上ノ町遺跡(第１次)	常滑窯製品甕	口縁部	Ⅳ区８号井戸址
9	上ノ町遺跡(第１次)	常滑窯製品片口鉢Ⅰ類	口縁部	Ⅳ区８号井戸址
10	上ノ町遺跡(第１次)	常滑窯製品甕	口縁部	Ⅳ区３７号井戸址
11	上ノ町遺跡(第１次)	常滑窯製品片口鉢Ⅰ類	口縁部	Ⅳ区３７号井戸址
12	上ノ町遺跡(第１次)	龍泉窯系青磁劃花文碗	口縁部	Ⅳ区３８号井戸址
13	上ノ町遺跡(第１次)	常滑窯製品甕	胴部	Ⅳ区３８号井戸址
14	上ノ町遺跡(第１次)	常滑窯製品片口鉢Ⅰ類	口縁部	Ⅳ区３９号井戸址
15	上ノ町遺跡(第３次)	白磁碗？	底部	第３区第４号井戸址
16	上ノ町遺跡(第３次)	南伊勢系土鍋	口縁部～胴部	第３区第４号井戸址
17	上ノ町遺跡(第３次)	轆轤成型かわらけ	口縁部～底部	第３区第１４号土坑
18	上ノ町遺跡(第３次)	轆轤成型かわらけ	口縁部～底部	第３区第１４号土坑
19	上ノ町遺跡(第３次)	轆轤成型かわらけ	口縁部～底部	第３区第１４号土坑
20	上ノ町遺跡(第３次)	常滑窯製品片口鉢Ⅰ類	口縁部	第４区第３号井戸址
21	上ノ町遺跡(第３次)	轆轤成型かわらけ	口縁部～底部	第４区ピット９９
22	上ノ町遺跡(第３次)	龍泉窯系青磁劃花文碗	口縁部	第５区第２号井戸址
23	上ノ町遺跡(第３次)	龍泉窯系青磁無文碗	体部	第６区ピット７
24	上ノ町遺跡(第６次)	瀬戸窯製品灰釉四耳壺	口縁部	２３号掘立柱建物
25	上ノ町遺跡(第６次)	轆轤成型かわらけ	口縁部～底部	２号竪穴状遺構
26	上ノ町遺跡(第６次)	瀬戸窯製品灰釉四耳壺	口縁部	２号竪穴状遺構
27	上ノ町遺跡(第６次)	龍泉窯系青磁蓮弁文碗	体部	９号竪穴状遺構
28	上ノ町遺跡(第６次)	龍泉窯系青磁蓮弁文碗	口縁部	１０号竪穴状遺構
29	上ノ町遺跡(第６次)	白磁口兀皿	口縁部	１号井戸
30	上ノ町遺跡(第６次)	龍泉窯系青磁蓮弁文碗	体部	１号井戸
31	上ノ町遺跡(第６次)	転用陶器片(常滑窯製品)		１号井戸
32	上ノ町遺跡(第６次)	石墨片岩製板碑		１号井戸
33	上ノ町遺跡(第６次)	白磁口兀碗	底部	５号井戸
34	上ノ町遺跡(第６次)	龍泉窯系青磁蓮弁文碗	口縁部	６号溝
35	上ノ町遺跡(第６次)	渥美窯製品甕	口縁部	３１号溝
36	上ノ町遺跡(第６次)	龍泉窯系青磁無文碗	口縁部	４５号溝
37	上ノ町遺跡(第６次)	砥沢産流紋岩質凝灰岩製砥石		４５号溝
38	上ノ町遺跡(第６次)	箱根産安山岩製石臼		４５号溝
39	上ノ町遺跡(第６次)	轆轤成型かわらけ	口縁部～底部	６０号溝
40	上ノ町遺跡(第６次)	常滑窯製品甕	口縁部	６０号溝
41	上ノ町遺跡(第６次)	東播窯片口鉢	口縁部	６０号溝
42	上ノ町遺跡(第６次)	鉄釘		６０号溝
43	上ノ町遺跡(第６次)	飾り金具		６０号溝
44	上ノ町遺跡(第６次)	常滑窯製品片口鉢Ⅰ類	口縁部	９０号溝
45	上ノ町遺跡(第６次)	常滑窯製品片口鉢Ⅰ類	底部	９０号溝
46	北C遺跡	瀬戸窯製品灰釉劃花木葉文梅瓶	口縁部～底部	
47	北C遺跡	瀬戸窯製品灰釉四耳壺	口縁部～底部	
48	北C遺跡	常滑窯製品壺	口縁部～底部	
49	北C遺跡	常滑窯製品壺	口縁部～底部	
50	間門B遺跡	轆轤成型かわらけ	口縁部～底部	第３号溝状遺構
51	間門B遺跡	常滑窯製品甕口縁部	口縁部	第３号溝状遺構
52	間門B遺跡	常滑窯製品片口鉢Ⅱ類	底部	第３号溝状遺構
53	間門B遺跡	灰釉陶器皿(瀬戸窯製品か？)	底部	第３号溝状遺構
54	間門B遺跡	陶器擂鉢(備前窯か？)	底部	第３号溝状遺構

表3　出土遺物一覧表(1)

図版No	遺跡名	出土遺物	部位	出土遺構
55	間門B遺跡	流紋岩質凝灰岩製砥石		第３号溝状遺構
56	間門B遺跡	轆轤成型かわらけ	口縁部	第８号溝状遺構
57	間門B遺跡	常滑窯製品片口鉢Ⅰ類	口縁部	第８号溝状遺構
58	間門B遺跡	常滑窯製品片口鉢Ⅱ類	底部	第８号溝状遺構
59	間門B遺跡	常滑窯製品片口鉢Ⅰ類	口縁部	第９号溝状遺構
60	広町遺跡(第４次)	常滑窯製品甕	口縁部	２１地点７号井戸
61	広町遺跡(第４次)	常滑窯製品甕	口縁部	２１地点７号井戸
62	広町遺跡(第４次)	青磁碗	底部	２１地点７号井戸
63	広町遺跡(第４次)	常滑窯製品片口鉢Ⅰ類	口縁部	２１地点７号井戸
64	広町遺跡(第４次)	常滑窯製品片口鉢Ⅰ類	口縁部	２１地点７号井戸
65	広町遺跡(第４次)	手捏ね成形かわらけ	口縁部～底部	２１地点７号井戸
66	広町遺跡(第４次)	南伊勢系土鍋	口縁部	２１地点３９９号溝状遺構
67	下ヶ町遺跡(第８次)	轆轤成型かわらけ	口縁部	１２区６号井戸址
68	下ヶ町遺跡(第８次)	手捏ね成形かわらけ？	口縁部	１２区６号井戸址
69	金山遺跡(第４次)	常滑窯製品甕	口縁部	第１号井戸址
70	金山遺跡(第４次)	常滑窯製品片口鉢Ⅰ類	底部	第１号井戸址
71	金山遺跡(第４次)	龍泉窯系青磁劃花文皿	口縁部	第２号井戸址
72	金山遺跡(第４次)	龍泉窯系青磁劃花文碗	口縁部	第２号井戸址
73	金山遺跡(第４次)	同安窯青磁櫛掻文碗？	体部	第２号井戸址
74	金山遺跡(第４次)	常滑窯製品甕	底部	第２号井戸址
75	金山遺跡(第４次)	流紋岩質凝灰岩製砥石		第２号井戸址
76	金山遺跡(第４次)	流紋岩質凝灰岩製砥石		第２号井戸址
77	金山遺跡(第４次)	軽石		第２号井戸址
78	金山遺跡(第４次)	軽石		第２号井戸址
79	金山遺跡(第４次)	転用陶器片(常滑窯製品)		第２号井戸址
80	金山遺跡(第４次)	北宋銭(政和通寶)		第２号井戸址
81	金山遺跡(第４次)	板状木製品(曲物の底？)		第２号井戸址
82	金山遺跡(第４次)	板状木製品(曲物の底？)		第２号井戸址
83	金山遺跡(第４次)	板状木製品		第２号井戸址
84	金山遺跡(第４次)	柱状木製品		第２号井戸址
85	本社Ａ遺跡(第７次)	轆轤成型かわらけ	口縁部～底部	５号溝
86	本社Ａ遺跡(第７次)	轆轤成型かわらけ	口縁部～底部	５号溝
87	本社Ａ遺跡(第７次)	轆轤成型かわらけ	口縁部～底部	５号溝
88	本社Ａ遺跡(第７次)	轆轤成型かわらけ	口縁部～底部	５号溝
89	本社Ａ遺跡(第７次)	手捏ね成形かわらけ	口縁部～底部	６号溝
90	本社Ａ遺跡(第７次)	手捏ね成形かわらけ	口縁部～底部	６号溝
91	本社Ａ遺跡(第７次)	手捏ね成形かわらけ	口縁部～底部	６号溝
92	本社Ａ遺跡(第７次)	手捏ね成形かわらけ	口縁部～底部	６号溝
93	本社Ａ遺跡(第７次)	手捏ね成形かわらけ	口縁部～底部	６号溝
94	本社Ａ遺跡(第７次)	手捏ね成形かわらけ	口縁部～底部	６号溝
95	本社Ａ遺跡(第７次)	手捏ね成形かわらけ	口縁部～底部	６号溝
96	本社Ａ遺跡(第７次)	手捏ね成形かわらけ	口縁部～底部	６号溝
97	本社Ａ遺跡(第７次)	轆轤成型かわらけ	口縁部～底部	６号溝
98	本社Ａ遺跡(第７次)	轆轤成型かわらけ	口縁部～底部	６号溝
99	本社Ａ遺跡(第７次)	轆轤成型かわらけ	口縁部～底部	６号溝
100	本社Ａ遺跡(第７次)	轆轤成型かわらけ	口縁部～底部	６号溝
101	本社B遺跡(第2次)	轆轤成型かわらけ	口縁部～底部	２号建物址
102	本社B遺跡(第2次)	轆轤成型かわらけ	口縁部～底部	１号土坑
103	本社B遺跡(第2次)	轆轤成型かわらけ	口縁部～底部	４号土坑
104	本社B遺跡(第2次)	轆轤成型かわらけ	口縁部～底部	４号土坑
105	本社B遺跡(第2次)	轆轤成型かわらけ	口縁部～底部	４号土坑
106	本社B遺跡(第2次)	轆轤成型かわらけ	口縁部～底部	４号土坑
107	本社B遺跡(第2次)	轆轤成型かわらけ	口縁部～底部	４号土坑
108	本社B遺跡(第2次)	轆轤成型かわらけ	口縁部～底部	４号土坑

表4　出土遺物一覧表(2)

図版No	遺跡名	出土遺物	部位	出土遺構
109	本社B遺跡(第2次)	轆轤成型かわらけ	口縁部～底部	４号土坑
110	本社B遺跡(第2次)	轆轤成型かわらけ	口縁部～底部	４号土坑
111	本社B遺跡(第2次)	轆轤成型かわらけ	口縁部～底部	４号土坑
112	本社B遺跡(第2次)	轆轤成型かわらけ	口縁部～底部	４号土坑
113	本社B遺跡(第2次)	轆轤成型かわらけ	口縁部～底部	４号土坑
114	本社B遺跡(第2次)	轆轤成型かわらけ	口縁部～底部	４号土坑
115	本社B遺跡(第2次)	轆轤成型かわらけ	口縁部～底部	４号土坑
116	本社B遺跡(第2次)	轆轤成型かわらけ	口縁部～底部	４号土坑
117	本社B遺跡(第2次)	轆轤成型かわらけ	口縁部～底部	４号土坑
118	本社B遺跡(第2次)	轆轤成型かわらけ	口縁部～底部	４号土坑
119	本社B遺跡(第2次)	轆轤成型かわらけ	口縁部～底部	４号土坑
120	本社B遺跡(第2次)	轆轤成型かわらけ	口縁部～底部	４号土坑
121	本社B遺跡(第2次)	轆轤成型かわらけ	口縁部～底部	４号土坑
122	本社B遺跡(第2次)	轆轤成型かわらけ	底部	４号土坑
123	本社B遺跡(第2次)	轆轤成型かわらけ	口縁部～底部	４号土坑
124	本社B遺跡(第2次)	轆轤成型かわらけ	口縁部～底部	４号土坑
125	本社B遺跡(第2次)	龍泉窯系蓮弁文碗	体部	４号土坑
126	本社B遺跡(第2次)	鉄釘		４号土坑
127	宮ノ腰遺跡(第９次)	轆轤成型かわらけ	口縁部～底部	Ｔ１号溝状遺構
128	宮ノ腰遺跡(第９次)	轆轤成型かわらけ	口縁部～底部	Ｔ１号溝状遺構

表5　出土遺物一覧表(3)